

## 井上哲次郎の『訂増英華字典』に於ける訳語の修整についての考察

金 敬雄

### 要 旨

井上哲次郎の『訂増英華字典』里、有許多将其底本羅布存徳『英華字典』的漢語部分加以修訂之處。筆者已在拙稿里就「与符号相關的漢語修訂」、「變更字序的漢語修訂」、「同義語・近義語相替換的漢語修訂」、「漢語的修訂錯誤」、「漢語的訂正」等部分進行了考察。本文將未能列入上述部分的漢語修訂內容全部（異体字的替換除外）列舉出來，考察其修訂的特徵。本文列舉的漢語修訂項目，其修訂的結果，漢語与英語的語意対応關係并未發生變化，因此將其命名為「漢語的修整」。

### 一、はじめに

ロブシャイドの『英華字典』（1866～1869年）は近代漢語の研究で非常に注目されている書物の一つである。日本でこれを底本にして明治16-18年井上哲次郎によって『訂増英華字典』が出版された。そして、明治32年、明治39年二回に亘って日本で版が重ねられ、また1903年に上海でも刊行されている<sup>(1)</sup>。この『訂増英華字典』の訂増についての先行研究が若干あるものの、訂増の全容がまだ明らかにされていない。

森岡健二氏は著書『近代語の成立・明治期語彙編』（昭和44年）の中で井上哲次郎の『訂増英華字典』の訂増内容についての論述があるが、訳語の脱落と訳語の増補にしか触れていない。<sup>(2)</sup>

また、井上哲次郎の『訂増英華字典』の訂増内容に関する最近の研究として寒河江實氏<sup>(3)</sup>と宮田和子氏<sup>(4)</sup>の論文がある。寒河江實氏は主にAの部における親見出し項の増補と訳語の削除について論述している。宮田和子氏1999は増補訳語を中心に井上哲次郎の『訂増英華字典』の典拠について論述している。また宮田和子氏2000は「動詞の自他、分詞、付録を中心に」井上哲次郎の『訂増英華字典』の典拠について論述している。しかし、宮田和子氏の論文2本とも本文については「A、L、Y、Z」の部に限った論述である。

井上哲次郎の『訂増英華字典』の性格を明らかにするには全巻を通じての多角度からの考察が不可欠となる。そういう観点から筆者は数年の時間をかけて、井上哲次郎の『訂増英華

字典』<sup>(5)</sup> (以下「訂増版」と称する) とその底本であるロブシャイドの『英華字典』<sup>(6)</sup> (以下「底本」と称する) とを照らし合わせ、両方を逐一比較し、訂増された内容をデータベースに作成し、さらに分類作業を行ってきた。その中で、英語の訂増にかかわらない訳語の訂増についてはおおまかに次の四つに分類した。

- ・訳語の削減: 訳語の一部または全部が本来対応していた英語のところから外されたもの。  
これに関してはすでに拙稿 (1999a) で考察してみた。
- ・訳語の修訂: 本来の訳語についての改訂。その内、「符号に関わる訳語の修訂」、「字順の変更による訳語の修訂」、「同義語・類義語の入れ替えによる訳語の修訂」、「訳語の修訂ミス」、「訳語の訂正」に関してはすでに拙稿 (1999b、2000a、2000b、2000c、2001) で考察してみた。
- ・訳語の新設: 底本では訳語がなかった見出し語及び子見出しの英語に訂増版で初めて訳語を付けたもの。
- ・訳語の増補: 底本の訳語の上に新たな訳語を補充したもの。

なお、英語の訂増に伴う訳語の訂増としては次の三つに分類した。

- ・英語の削除: 底本にあった見出し語または子見出しの英語が削除され、それに伴って対応していた訳語も一緒に削除されているもの。
- ・英語の修訂: 底本にあった見出し語または子見出しの英語が修訂され、それに伴って訳語が修訂されているもの。
- ・英語の新設: 底本になかった見出し語または子見出しの英語を訂増版で新たに増補し、それに伴って対応する訳語も新たに付けられているもの。

本稿では井上哲次郎の『訂増英華字典』における「訳語の修訂」の全容を解明する一環として、訳語の修整について考察してみたい。上で述べたように訳語の修訂について、すでに「符号に関わる訳語の修訂」、「字順の変更による訳語の修訂」、「同義語・類義語の入れ替えによる訳語の修訂」、「訳語の修訂ミス」、「訳語の訂正」などに分類して考察してきた。本稿ではそれらの部類で扱えなかった訳語の修訂項目を異体字の部分を除いて、一括して取り上げることにした。本稿で取り上げる修訂項目には「修訂の結果、訳語と英語との意味上の対応関係の変化が生じていない」という特徴があるので、「訳語の修整」と称することにした。

## 二、訳語の修整

以下において、訳語の修整について考察するが、訳語が対応している英語の特徴から「見出し語の部分」と「子見出しの部分」に分類することにした。各項目に修整されている訳語以外に複数の訳語が付いている場合もある。その際、修整されている訳語またはその部分にアンダーラインを付して示す。なお、各項目の見出し語の後に品詞を付けるが、それらは全部訂増版に拠っている。

## I. 見出し語の部分

次の1～4番はいずれも見出し語に対応している訳語が修整されているものである。そして、見出しの英語に改訂が加えられていない。ここでは、各項目を「見出し語、品詞、底本の訳語 ⇒ 訂増版の訳語」の形で提示する。

### 1. Abditory, n. 躲身之處 ⇒ 藏愚貨物之處

底本の訳語「躲身之處」は「人が身を隠す場所」という意味になるのに対して、訂増版の訳語「藏愚貨物之處」は「物を隠す場所」という意味になっている。即ち、「隠す場所」という意味では同じだが、隠される対象が「人」か「物」かの違いである。「Abitory」について、*OED*の解釈の中に「a hidden or withdrawn place」という部分がある。この解釈から見て、隠される対象が「物」に限られているとは言い難い。即ち隠される対象が「人」である可能性が十分ある。したがって、底本の訳語と訂増版の訳語がいずれも英語「Abitory」と意味上対応するものと言えよう。

### 2. Abib, n. 猶大人正月 ⇒ 猶太人正月

現代中国語ではユダヤ人のことを「猶太人」と言う。これは「Judean」の音訳だと思われる。音訳語として考えた場合、底本の「猶大人」が間違いとは言えない。したがって、この項を訳語の訂正の部類に入れず、訳語の修整例として本稿で取り上げることにした。

### 3. Affectory, n. 依様畫葫蘆嘅人 ⇒ 依様畫葫蘆嘅(之)人

底本で「之」が北京官話の発音表記の中にあつた。訂増版で底本にあつた訳語の発音表記をすべて外している。その際、「之」を訳語の中に移動したため、訳語が「依様畫葫蘆嘅(之)人」になった。

### 4. Amomum cardamomum, n. 水菴, 杏菴。 ⇒ 水菴, 荳菴。

*OED*によれば、「Amomum」と「cardamomum」はいずれも香辛料用の植物を指す言葉である。特に「cardamomum」については、その産地が東南アジアと中国で、薬と料理の薬味として使用されると記してある。また、『漢語大詞典』には「荳菴」が植物名として収録されており、それがまた「草荳菴」、「白荳菴」とも称され、特徴は葉っぱが大きく針の形をし、花は薄い黄色で、果実は楕円形、種は香ばしい。果実と種は薬として使用できると説明されている。

これらの解釈から、訳語「荳菴」と英語「Amomum cardamomum」との共通点が多いことが分かる。しかし、底本と訂増版で共に「水菴」も使用しているし、「杏菴」が「荳菴」の異名である可能性も考えられる。したがって、この項を訳語の訂正の部類に入れず、訳語の修整例として本稿で取り上げることにした。

### 5. Anglo-Norman, n. 英哪啞人 ⇒ 英那間人

底本の「啞」は『漢語大字典』、『漢語大詞典』、『大漢和辭典』で確認できない。ロブシャイドの『英華字典』では、独自の創作と思われる文字が多く見られる。漢字の特徴から

推しておそらく「啁」を「問」と同じ読みを持たせたものと思われる。一方、底本では同じ見出しの中に「屬英那問人者」も使用されている。即ち、訂増版の修整が訳語を「英那問人」に統一した格好となっている（下の図1を参照されたい）。

以上のことを踏まえた上で、さらにこの項が音訳であることも考慮し、この項を訳語の訂正の部類に入れず、訳語の修整例として本稿で取り上げることにした。

図1

(訂増版)

(底本)

Anglo-Norman, a. Pertaining to the Anglo-Norman, 屬英那問人者.  
Anglo-Norman, n. 英那問人.

Anglo-Norman, an; 英啁問人 Ying Norman yan.  
Ying Norman jin; pertaining to the Anglo-Norman, 屬英那問人者 shuk, Ying Norman yan.  
'châ. Shuh Ying Norman jin châ.

6. Arabic, a. 亞喇伯的, 亞喇伯話。 ⇒ 亞喇伯的, 亞喇伯話的。

中国語において、宋の時代から「的」がすでに助詞として使用されるようになってきている<sup>(7)</sup>。そして、形容詞が名詞を修飾する際、形容詞の後に「的」が付くようになっていた<sup>(8)</sup>。即ち、形容詞の後の「的」は、あくまでも文法的な機能である。したがって、この修整によって訳語の意味の変化が生じていない。

7. Backstitch, n. 扣針, 歩歩扣針, 珠。 ⇒ 扣針, 歩歩扣針, 球。

「珠」と「球」はいずれも英語「Backstitch」に関わる意味がない。ちなみに、この2語は字体が類似する上、「丸い形をした物」という意味では同義語である。しかし、どちらも対応する英語と意味上の対応を成していないため、拙稿2000bでは扱わず、本稿で取り上げることにした。

8. Cichoraceous, a. 萵苣 ⇒ 萵苣嘅

訂増版で訳語に「嘅」を付けている。広東語で「嘅」が助詞として使用される場合、「的」の意味になる。即ち、上の6番と同じ類の修整となっている。

9. Diacoustic, a. 聲響之學 ⇒ 聲響之學的

上の6番と同様である。

10. Double-banked, a. 孖槳艇 ⇒ 孖槳艇的

上の6番と同様である。

11. Halleluia, Hallelujah, n. 讚美上帝, 讚美爺和華。 ⇒ 讚美上帝, 讚美耶和華。

この項は実質上「爺」と「耶」の入れ替えになっている。『漢語外来詞詞典』によれば、「耶和華」の語源が英語の「jehovah」であり、その元は「Yahweh」だろうと記してある。だとすれば、「Yahweh」の音訳として「爺和華」が間違いだとは言えない。これは上の2番と同じ類の修整である。

12. Invincible, a. 唔贏得嘅, 唔服得嘅, 不能勝的, 不可勝, 贏不得, 不克勝, 敵不可勝, 戰不勝的。 ⇒ 唔贏得嘅, 唔服得嘅, 不能勝的, 不可勝, 贏不得, 克勝, 敵不可勝, 戰不勝的。

『漢語大詞典』によれば、「克勝」は「敵を打ち負かし、勝ちを制する」という意味であ

る。底本の訳語「不克勝」は「克勝」の否定表現となっている。対応する英語「Invincible」には「不可能」のニュアンスが含まれている。それに対して、「不克勝」には「不可能」のニュアンスが全くない。そのため、訂増版で修訂を行ったものと思われる。しかし、修訂後の訳語「克勝」が英語「Invincible」の反対の意味になってしまった。

ちなみに、英語「Invincible」に対応させるためには、訳語を「不能克勝」にするべきであろう。

13. Scholiast, n. 解書者, 者書者, 旁訓註, 釋義者。 ⇒ 解書者, 註書者, 旁訓註者, 釋義者。

この項は拙稿2001で一度取り上げ、「者書者」から「註書者」への訂正について述べてきた。本稿では、「旁訓註」から「旁訓註者」への修訂に注目し、再度取り上げることにした。

この項では他の訳語がいずれも「～者」の形になっているのに、「旁訓註」だけが「者」が付いていない。そのため、訂増版で「旁訓註者」に修訂したものと思われる。この際の「～者」を「事を表す」という意味で捉えれば、「旁訓註」と「旁訓註者」が同じ意味になる。

ただし、「旁訓註」は一応単語として捉えられるのに対して、「旁訓註者」は短文形式なので、この項を拙稿2000bでは扱わず、本稿で取り上げることにした。

14. Stare, n. 樽眼睇嘅事, 睇者, 睇視。 ⇒ 樽眼睇嘅事, 睇, 睇視。

「睇」は「じっと見つめる」という意味である。また、底本のほうの「～者」を「事を表す」という意味で捉えることができる。したがって、「睇者」と「睇」はいずれも英語「Stare」と意味上の対応を成している。

ただし、「睇」は単語として捉えられるのに対して、「睇者」は短文形式なので、この項を拙稿2000bでは扱わず、本稿で取り上げることにした。

## II. 子見出しの部分

この部分では子見出しの英語に対応している訳語の修整になるが、訳語が対応している子見出しの特徴から、さらに「英語が共通するもの」と「英語に改訂が加えられているもの」に分類することにした。

### a. 英語が共通しているもの

次の1～10番は、いずれも訂増版で底本の子見出しの英語をそのまま継承し、対応する訳語に修整を施しているものである。ここでは、各項目を「見出し語, 品詞, 子見出しの英語, 底本の訳語 ⇒ 訂増版の訳語」の形で提示する。

1. A, a pencil. 一枝筆 / a pencil. 一管筆 ⇒ 一枝(管)筆

底本では、見出し語「A」の中で「a pencil, 一枝筆」と「a pencil, 一管筆」の二つの項目となっていた。それを訂増版で子見出しの英語を一つにしている。そして、訳語も「一枝(管)筆」の形に併合した。

『漢語大字典』によれば、「管」も「枝」も筆を数える数量詞としての用法がある。ところが、底本では二つだった訳語「一枝筆」と「一管筆」を訂増版で「一枝(管)筆」の形に併合しているため、「一枝筆」が主要な表現形態として打ち出される結果となった。

ちなみに、現代中国語では、「一枝筆」のほうが一般的に使用されている。

2. Cagmag, n. tough, dry meat. 芻肉, 𦉳。⇒ 芻肉, 𦉳。

底本の訳語「𦉳」には対応する英語に関わる意味がない。そのため、訂増版で修訂を行ったものと思われる。しかし、『漢語大字典』によれば、訂増版の訳語「𦉳」は「肌が破れる」という意味である。したがって、英語「tough, dry meat」とは意味上の対応を成していない。

3. Chair, n. a camp-chair. 馬极 ⇒ 馬鋸

訳語「馬极」と「馬鋸」が『漢語大詞典』、『大漢和辞典』などで確認できない。したがって、この2語を英語「a camp-chair」と意味上対応していないものと見ていいであろう。

ちなみに、英語「a camp-chair」に対応する中国語として「馬扎」を付けたほうが適切であろう。これは折り畳みのできる簡易な腰掛けを指す言葉である。また、広東語でこれに相当する言葉として「馬閘」がある。

4. Colares, n. the genuine wine of Portugal. 眞葡萄芽酒 ⇒ 眞葡萄牙酒

この項は実質上「芽」と「牙」の入れ替えとなっている。この2文字の発音は同じである。現代中国語では、ポルトガルのことを訂増版のほうの「葡萄牙」を使用している。しかし、音訳語として、「葡萄芽」が間違っているとは言えない。これは上の「二・I」の2、1 1番などと同じ類の修整である。

5. Coloration, n. the art or practice of coloring. 點綉者, 綉染者, 點綴者, 綉文。⇒ 點綉者, 綉染色, 點綴者, 綉文。

底本の訳語「綉染者」が「着色すること」という意味になるので、英語「the art or practice of coloring」と意味上の対応を成している。訂増版で底本の訳語「綉染者」を「綉染色」に修訂している。「綉染色」は「着色する」という意味になり、これも英語「the art or practice of coloring」と意味上の対応を成している。

6. Cover, n. to take off a cover. 擱, 掲起蓋。⇒ 擱起, 掲起蓋。

『漢語大詞典』によれば、底本の訳語「擱」は「覆」の意味である。「覆」には「くつがえす」、「蓋をする」などの意味がある。ところが、この項の「擱」を「くつがえす」の意味で取っても、その対象物が何か明確ではない。即ち、「擱」だけでは英語「to take off a cover」との意味上の対応を成していない。また、訂増版の訳語「擱起」は「起」が付くことで、「くつがえす」という意味はより明白になっている。しかし、その対象物が依然示されておらず、英語「to take off a cover」との対応では、底本の訳語とほとんど同様である。

7. Covey, n. a brood or hatch of birds. 一門 ⇒ 一料

「門」と「料」には「雛」に関わる意味がない。したがって、「一門」と「一料」はいず

れも英語「a brood or hatch of birds」の訳語としてふさわしくない。

8. Coy, a. not easily condescending to familiarity. 慎重, 悞悞。⇒ 慎重, 悞悞, 端莊。

この項は拙稿2000cで一度取り上げ、「慎重」から「填重」への修訂ミスについて述べてきた。本稿では、「悞悞」から「悞悞」への修訂に注目し、再度取り上げることにした。

『漢語大字典』の「悞」の項に「悞悞」が例示され、「意味が尽くされていない」という意味だと記してある。また、『大漢和辭典』にも「悞悞」が載っている。しかし、いずれにおいても底本の訳語「悞悞」が確認できない。『大漢和辭典』によれば、「悞」は「悞」の俗字である。底本の訳語「悞悞」はおそらく「悞悞」の間違いであろう。そのため、訂増版で修訂を行われたものと思われる。ところが、修訂後の訳語が「悞悞」となっている。これはおそらく底本の訳語「悞悞」を「悞悞」に修訂する過程で何らかの理由で字順が逆になってしまったためであろう。

なお、井上・訳語のほうの「端莊」は訂増版で新たに増補された訳語である。

9. Dinner, n. after dinner sit a while, after supper walk a mile. 大餐後則坐片時, 晚餐後則行三里。

⇒ 大餐後則坐片時晚餐後則行一里。

底本の訳語にあった「, 」が訂増版で削除されている。しかし、それによる訳語の意味の変化が生じていない。

この項は実質上「三里」が「一里」に入れ替えられている。この部分と対応している英語が「a mile」である。1マイルが1609.344mであり<sup>(9)</sup>、中国の1里は578mだと言われている<sup>(10)</sup>。したがって、1マイルが中国の3里近くになる。即ち、底本の「三里」は実際の距離に基づいたものとなっている。それに対して、訂増版では、「a mile」の部分「一里」に修整している。たとえ、これが日本の1里だとしても、1里が約4kmになるので<sup>(11)</sup>、1マイルとは倍以上の差がある。

しかし、この項の表現は夕食の後、実際に歩くべき距離が「1609.344m」、「578m」、「4000m」といった具体的な数字に意味を持つものではなく、食後の軽い散歩を指しているものである。その際、各言語における最小の整数がこのような表現にもっともふさわしいであろう。そう考えた場合、訂増版の訳語が実際の距離に合わなくても、言語表現の角度から見て、それなりの合理性がある。

10. Lophius, n. fishing frog. 震麻魚, 虎魚。⇒ 震麻魚, 虎魚。

この項は実質上「麻」と「麻」の入れ替えとなっている。この2文字は「しびれる」という意味では同義語である。「震麻魚」と「震麻魚」を強いて解釈すれば、「魚を振動でしびれさせる」という意味になるであろう。ところが、英語「fishing frog」は魚を捕るための道具を指すものなので、意味上の対応を成していない。

また、訳語「虎魚」は修訂されていないが、これも英語「fishing frog」と意味上の対応をなしていない。『大漢和辭典』によれば、「虎魚」は「海魚の名」である。たとえ「虎」を

動詞として捉えても「虎魚」が「魚を威嚇する」という意味になり、英語との対応にはならない。

なお、この項は英語との意味上の対応を成していない問題があるため、同義語の入れ替えであるにも関わらず、本稿で取り上げることにした。

#### b. 英語に改訂が加えられているもの

次の1～6番はいずれも訳語が対応している子見出しの英語に何らかの修訂が加えられているものである。しかし、これら英語の修訂がその項の訳語の修整とは直接関わっていない。したがって、英語の修訂に関してはコメントを付けず、表記に留めておきたい。なお、英語が修訂されている部分にはアンダーラインを付して示す。

この部分では、各項目を「見出し語、品詞、底本の子見出し、訂増版の子見出し、底本の訳語 ⇒ 訂増版の訳語」の形で提示する。

1. Caumatic, a. (底本) a simple phlogistic fever. (訂増版) of the nature of a simple phlogistic fever.

焼病 ⇒ 焼病的

上の「二・I」の6番と同様である。

2. Draw, v.t. (底本) ditto to the left. (訂増版) to draw a slanting stroke to the left. 捺 ⇒ 搨

底本の訳語「捺」には英語「to draw a slanting stroke to the left」に関わる意味がない。そのため、訂増版で修訂を行ったものと思われる。ところが、『漢語大字典』によれば、訂増版の訳語「搨」は「つまむ」という意味であり、依然英語「to draw a slanting stroke to the left」との対応を成していない。

字体が酷似しているところから推して、底本の訳語「捺」はおそらく「搨」の誤りだと思われる。しかし、「搨」は上から右へ斜めに下がる筆画を指す言葉なので、英語「to draw a slanting stroke to the left」とは反対の意味になる。英語との対応で考えれば、訳語を「撇」にするべきである。

3. Knead, v.t. (底本) to, with the feet. (訂増版) to knead with the feet. 躪過 ⇒ 躪野

底本の訳語「躪過」は、過去を表す表現となっている。それに対して英語「to knead with the feet」は過去または完了の表現ではない。そのため、訂増版で修訂を行ったものと思われる。ところが、訂増版の訳語「躪野」が意味不明である。

広東語には量詞として使用される「嘢」がある。「嘢」と「野」の字体の類似性から見て、訂増版の「野」は「嘢」の誤りである可能性がある。数的にあまり多くないが、上の「二・I」の8番のように訂増版で訳語の修訂を行う際、広東語を使用するケースも見られる。

4. Letter, n. (底本) italic letters. (訂増版) Italic letters. 以大利字 ⇒ 以太利字

この項は実質上「以大利」から「以太利」への修整となっている。訳語が対応している英語が「Italic」で、音訳であることが分かる。したがって、上の「二・I」の2、11番、「二・



II・a」の4番などと類似する修整である。

5. Robin, n. (底本) a, from Kweilin. (訂増版) a robin from Kweilin. 桂林相思 ⇒ 桂林相思雀  
底本の訳語では「robin」の部分が抜けている。そのため、訂増版で「雀」を付け加えたであろう。ただし、これが慣用的な表現であるならば、「桂林相思」だけでも英語「a robin from Kweilin」との対応は成立するものである。したがって、この項を訳語の訂正の部類に入れず、訳語の修整例として本稿で取り上げることにした。

6. Salmon, n. (底本) ditto, osmerus(?). (訂増版) osmerus(?). 錦鱗鮭 ⇒ 錦鱗鱈  
底本と訂増版ともに英語「osmerus」に「？」を付けている。これは英語自体を疑問視している印である。また、*OED*にも「osmerus」が載っていない。したがって、対応している訳語「錦鱗鮭」と「錦鱗鱈」についての是非は判断できない。

したがって、底本と訂増版の訳語を親見出しとの対応で考えてみたい。親見出しの「Salmon」は「鮭」である。ところが、『日本国語大辞典』(小学館昭和51.3.1)によれば、「鮭」が「フクラギ」と呼ばれている。そして、それは「ブリの若魚の称。全長40センチメートル内外のもの。いなだ。」と解釈されている。また、『大漢和辞典』によれば、「鱈」の「さめの一種」である。即ち、底本と訂増版の訳語どちらも見出し語「Salmon」と同一種類の魚ではないことが分かる。

### 三、搽から搽への修整

訂増版では、底本の訳語に使用されている「搽」を「搽」に修整したものがあつた。底本のほうの「搽」は『漢語大字典』、『漢語大詞典』、『大漢和辞典』で確認できない。これはおそらく「搽」の誤りであり、そのため、訂増版で修訂を行われたしたものと思われる。ところが、『漢語大字典』によれば、訂増版のほうの「搽」は「搽」の異体字である。そして「搽」は「ひねる」という意味なので、英語「Dip」と意味上の対応を成していない。これはおそらく訂増版で底本の「搽」を「搽」に修訂する過程で何らかの手違いで「搽」となつてしまったものであろう。

なお、訂増版で「搽」を「搽」に修整したものが全巻を通じて下記の7項が確認できた。

1. Dip, v.t. to immerse for a moment in water or other liquid substance. 扞, 搽, 蘸, 搨, 搨拏。  
⇒ 扞, 搽, 蘸, 搨, 搨拏。
2. Dip, v.t. to dip meat in a sauce. 俾肉搽醬, 以肉搽醬。 ⇒ 俾肉搽醬, 以肉搽醬。
3. Dip, v.t. to dip in a book. 搽吓書 ⇒ 搽吓書
4. Dip, v.i. to immerge in a liquid. 扞, 飲, 搽, 蘸。 ⇒ 扞, 飲, 搽, 蘸。
5. Dipped, pp. 扞過, 搨過, 搽過, 蘸過。 ⇒ 扞過, 搨過, 搽過, 蘸過。
6. Dipper, n. one who dips. 扞者, 搨者, 搽者, 蘸者。 ⇒ 扞者, 搨者, 搽者, 蘸者。
7. Dipping, ppr. 扞, 搨, 搽, 蘸。 ⇒ 扞, 搨, 搽, 蘸。

## 四、おわりに

上では井上哲次郎の『訂増英華字典』における訳語の修整について考察してみた。冒頭でも述べたように本稿で取り上げたものは、「符号に関わる訳語の修訂」、「字順の変更による訳語の修訂」、「同義語・類義語の入れ替えによる訳語の修訂」、「訳語の修訂ミス」、「訳語の訂正」、「異体字の入れ替え」などの部類に入れなかったものである。そのため、訳語の修訂形態がさまざまである。本稿で取り上げた訳語の修整項目全体を考察すると、次のような類型および特徴が挙げられる。

(1) 形容詞が「～的」の形態に修整されているもの。(5項)

「二・I」の6、8、9、10番

「二・II・b」の1番

この内、「二・I」の8番は「～嘸」となっている。

訳語の増補においても見出し語が形容詞の際、訂増版で増補する訳語を「～的」の形態を取ったものが157項ほど確認できた。もちろんすべての形容詞について「～的」の形態を取ったわけではないが、形容詞の文法的な機能の側面を意識していたことが窺える。

(2) 音訳語の修整 (5項)

「二・I」の2、5、11番

「二・II・a」の4番

「二・II・b」の4番

(3) 底本と訂増版の訳語の間に字体の類似性があるもの (17項)

「二・I」の2、5、7、11番

「二・II・a」の2、3、4、10番

「二・II・b」の2、4番

「三」の7項

(4) 底本の訳語と訂増版の訳語がいずれも英語と意味上の対応を成していないもの。(18項)

「二・I」の7、12番

「二・II・a」の2、3、6、7、8、10番

「二・II・b」の2、3、6番

「三」の7項

これらの内、多くのものは底本の訳語が英語と意味上の対応を成していないため、訂増版で修訂を行ったものと思われる。しかし、結果的には修訂後の訳語も英語と意味上の対応を成していない。だから、これらも訂増版の修訂ミスと見なすべきであろう。ただし、拙稿2000cでは底本で正しかったものを訂増版で修訂した結果、誤りとなったものを扱ったので、上の項目を本稿で取り上げることにした。

(5) 底本の訳語と訂増版の訳語がいずれも英語と意味上の対応を成しているもの。(8項)

「二・I」の1、3、13、14番

「二・II・a」の1、5、9番

「二・II・b」の5番

さらに、特徴(1)の5項と特徴(2)の5項もこの部類に入れることができる。それらも含めるとこの部分が18項になる。

(6) その他 (1項)

「二・I」の4番

上では、さまざまな角度から訳語の修整項目の類型および特徴をまとめてみたが、同じ項目が繰り返し取り上げられているケースもある。したがって、ここに挙げた項目数を合計すれば、本稿で取り上げた訳語の修整項目の数より多くなるので、そのことをここに断っておきたい。

なお、本稿で扱った項目がA～Zの部における分布状況は次の通りである。

A	B	C	D	H	I	K	L	R	S	合計
7	1	9	11	1	1	1	2	1	3	37

#### 注

1. 飛田良文・宮田和子 1997「十九世紀の英華・華英辞典目録—翻訳語研究の資料として」『国語研究 6 近代語の研究』明治書院 pp.502-510 を参照。
2. 森岡健二 1969『近代語の成立 明治期語彙編』明治書院 pp.78～81 を参照。  
この部分は平成3年の改訂版でも同様である。
3. 寒河江實 1998「ロブシャイドの『英華字典』—井上哲次郎の訂正増補本について—」『桜文論叢』第47巻
4. 宮田和子 1999「井上哲次郎『訂増英華字典』の典拠—増補訳語を中心に—」『英学史研究』第32号  
—— 2000「井上哲次郎『訂増英華字典』の典拠—動詞の自他、分詞、付録を中心に—」『或問』第1号
5. 井上哲次郎の『訂増英華字典』は1995年9月25日ゆまに書房から出版されている複製本を使用した。
6. 本稿では1995年佐藤武義・成澤勝共編のCD-ROM 複製版「ロブシャイド『英華字典』(アビリティ株式会社)を使用した。
7. 兪光中・植田均 1999『近代漢語語法研究』学林出版社 pp.410～416 を参照。
8. 蔣紹愚 1994『近代漢語研究概況』北京大学出版社 pp.171～181 を参照。
9. 小泉袈裟勝 1985『単位の辞典』改訂4版ラテイス p.284 を参照。
10. 小泉袈裟勝 1989『図解 単位の歴史辞典』柏書房 p.275 を参照。
11. 小泉袈裟勝 1985『単位の辞典』改訂4版ラテイス p.318 を参照。

## 主要参考文献

金敬雄

- 1999a 「井上哲次郎の『訂増英華字典』に於ける訳語の削減についての考察」  
『行政社会論集』第11巻 第4号 福島大学行政社会学会
- b 「井上哲次郎の『訂増英華字典』に於ける訳語の修訂についての考察 (I)  
——符号に関わる訳語の修訂——『行政社会論集』第12巻第2号福島大学  
行政社会学会
- 2000a 「井上哲次郎の『訂増英華字典』に於ける訳語の修訂についての考察 (II)  
——字順の変更による訳語の修訂——『行政社会論集』第13巻第1号  
福島大学行政社会学会
- b 「井上哲次郎の『訂増英華字典』に於ける訳語の修訂についての考察 (III)  
——同義語・類義語の入れ替えによる訳語の修訂——『行政社会論集』第13巻  
第2号福島大学行政社会学会
- c 「井上哲次郎の『訂増英華字典』に於ける訳語の修訂についての考察 (IV)  
——訳語の修訂ミス——『国際文化研究』第7号東北大学国際文化学会
- 2001 「井上哲次郎の『訂増英華字典』に於ける訳語の修訂についての考察 (V)  
——訳語の訂正——『行政社会論集』第13巻第4号福島大学行政社会学会

漢語大字典編輯委員會編著『漢語大字典』四川辭書出版社・湖北辭書出版社 1995年5月

漢語大詞典編輯委員會・漢語大詞典編纂處編『漢語大詞典』漢語大詞典出版社 1997年4月第一版

諸橋轍次著『大漢和辭典』大修館書店平成8年1月10日修訂第二版第四刷

『康熙字典』同文書局原版、中華書局香港分局 1975年2月

饒秉才・歐陽覺亞・周無忌編著『廣州話方言詞典』商務印書館 1985年6月

香港萬里機構出版有限公司・東方書店編『廣東語辭典』東方書店 1997年3月25日

鄭定歐編纂『香港粵語詞典』江蘇教育出版社 1997年5月

李榮主編『廣州方言詞典』江蘇教育出版社 1998年12月

劉正燾・高名凱・麥永乾・史有為編『漢語外來詞詞典』上海辭書出版社 1984年12月

中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編『現代漢語詞典』商務印書館 1989年8月

小学館 CD-ROM 版『ランダムハウス英語辞典』1998年11月26日

*The Compact Oxford English Dictionary*. Eds. J. A. Simpson and E. S. C. Weiner. 2nd ed. New York: Oxford, UP, 1991.